群教セ	G11 － 01
	平25.249集
	小・特別活動

集団生活を営む力を育む 異年齢交流活動の在り方

── 気付きを行動化につなげる話合い活動の工夫 ──

長期研修員　　江城　佐和子

キーワード　【特別活動　異年齢交流活動　話合い活動　ロールプレイ】

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成20年1月）の中で、特別活動の改善の基本方針として、特に、よりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度、自治的能力の育成を重視するとした。また、自分に自信が持てず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず、社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりすることから、体験活動、異年齢集団による活動、話合い活動を特に重視する活動とした。

これを受けて改訂された現行の学習指導要領の児童会活動では、新たに目標を設け、特に、年齢が異なる児童同士の人間関係を築き、楽しい生活をつくるなど自分たちの学校生活の向上を目指して、進んで話し合い、協力して実現しようとする自主的、実践的な態度の育成を重視している。

協力校の異年齢集団による交流（たてわり班活動）の現状は、全学年クラス解体１班30人程度15班編制で、業前活動10回程度と年２回のロング集会を行っている。活動のねらいは、学級や学年の枠を超えた仲間づくりや、自主的・自律的態度の育成、全職員で全校児童を育てることである。

６年生の実態調査アンケート（６月実施）を見ると、決まったことや言われたことはできるが、自分で判断し行動することに達成感や自信が持てない､班の中での自己効力感や自己有用感の実感が乏しい、自分の考えに自信が持てず､話合い活動で意見を言うことをためらっている児童が多いことがわかった。職員へのアンケートでも、自分から進んで話しかけたり、遊びに加わったりできる児童が少ないと感じていることが分かった。これらのことから、自ら集団に働きかけることができる児童の育成が、協力校の課題の１つと考えられる。

もう一つの課題としては、事前・事後活動のあり方がある。事前活動では、教師からの活動への指示伝達、話合い活動でも活動内容とルールの決定が多く、子ども自身が何のためにするのか、どのような工夫や注意が必要かなどを自分たちで予測して話合うことは少なかった。また、事後の振り返りも、活動の楽しさについての振り返りが多く、自分達の集団への働きかけによる成果と課題を生かそうと意識した活動は少なかった。児童主体の問題解決的な取り組みが求められている特別活動において、活動の目的を明確に持った児童主体の話合い活動や実践としては不十分な活動であったと考えられる。

そこで、本研究では、児童会集会活動を児童主体の活動にするために、６年生児童による振り返りと次回の活動計画をつなげた話合い活動の充実を図る。自分たちの目指す班の姿の実現に向けて、今回の活動手段や方法はどうであったか振り返り、気付いたことを班で話し合い、言語化、可視化して、行動目標を班で自己決定する。この自己決定を、計画づくりに生かして実行するといった一連の流れを一体化させ、思考の連続性を図り、行動目標実行の動機付けを行う。この繰り返しによって、自己決定力、協力する態度が高まっていく。また、下学年を楽しませようとする意欲やしてあげる喜び、班の役に立った経験が、人と関わりたい意欲の高まりにつながっていくと考えた。

そして、これらの自己決定力、協力、人と関わりたい意欲が高まることによって、６年生児童が主体的に活動に取り組むようになり、集団生活を営む力が高まっていく。６年生の集団生活を営む力が高まると、子どもたち同士の関わりがより活発になり、下学年児童も、６年生児童に対する感謝や憧れの気持ちが高まり、６年生の言動をモデルにして活動したり、班活動に協力したりするようになる。６年生児童が主体的に取り組む仲間づくりによって、下学年としての集団生活を営む力も高まり、相互成長が

見られると共に、児童の絆が深まると考えられる。そして、最終的には、児童主体による自主的ないじめ防止にもつながると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

異年齢集団による交流を主とした全校児童による集会活動において、６年生児童の集団生活を営む力を育むために、児童の気付きを行動化につなげる６年生による話合い活動の充実を図ることの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

１　主体的に考えることができるための話合い活動前の事前アンケート活用

活動計画作成場面において、アンケート結果をもとに班の課題や現状について話合い活動を行えば、班の課題や現状について共有し合うことができ、解決策を踏まえた行動目標や計画を主体的に考えることができるであろう。

２　振り返りの場面での「話合いシート」

活動の導入場面や活動直後の振り返りの場面において、話合いシートをもとに、活動の評価・改善・計画を連続して行えば、活動のねらいを踏まえた次なる活動の目標を持って計画することができ、主体的に活動に取り組むことができるであろう。

３　主体性を高めるロールプレイ

交流活動前の時間において、気付きを具現化するためのロールプレイを行えば、実際の場面に対処する具体的な手だてを身につけ、問題解決への主体性を高めることができ、活動場面で自分で考えて主体的に取り組むことができるであろう。

４　自己有用感や達成感を高める「振り返りカード」と教師による支持的言葉がけ

交流活動後において、全校児童による振り返りカードと班担当教師による６年生への支持的言葉がけを行えば、自己有用感や達成感が高まり、集団生活を営む力が高まるであろう。

Ⅳ　研究内容の概要

本研究では、異年齢集団による交流活動において、児童の気付きを行動化するための話合い活動を工夫し、児童の集団生活を営む力を育成する。そのために、第６学年の、次回の交流活動を計画する話合い活動において、事前に実施したアンケート結果を活かせるようにし、児童主体の交流活動ができるよう促す。具体的には、話合い活動で「話合いシート（KPTシート)」を活用し、交流活動の「振り返り」や「気付き」を班で話し合う。「話合いシート（KPTシート)」には、話合いの内容を言語化、可視化できる工夫をし、交流活動の目標を自己決定できるようにしていく。また、交流活動の前にロールプレイを行い、一人一人が交流活動で気を付けることに気付かせ、実践できるようにしていく。交流活動の後には、全校児童の「振り返りカード」の記載内容を活用するとともに班の担当教師から支持的な言葉がけを多く行い、第６学年の児童の自己有用感、達成感を高め、集団生活を営む力が高まるようにしていく。

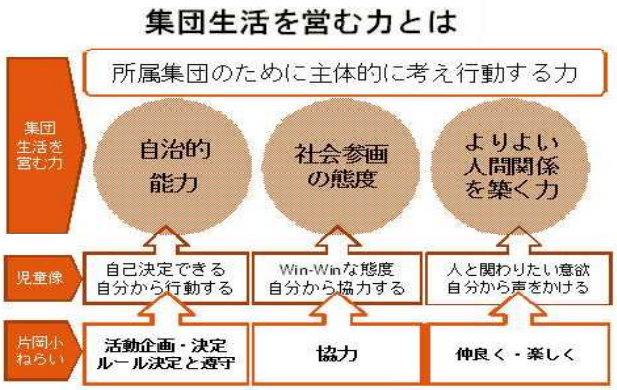
Ⅴ　研究の内容

１　「集団生活を営む力」「異年齢集団による交流活動」について

(1)　「集団生活を営む力」とは

本研究において、「集団生活を営む力」とは、自治的能力、社会参画の態度、よりよい人間関係を築く力の３つととらえる。自治的能力とは、自己決定する力であり、自ら行動することに喜びを感じる能力と考える。社会参画の態度とは、学年差や多様性を認め合い、立場や役割にとらわれず

自分も他者も満足したり納得したりするWin－Winの関係を築く力であり、協力する態度と考える。よりよい人間関係を築く力とは、人と関わりたいという意欲である。相手に共感する気持ちや思いやりの心を持って行動できる力であると考える。集団生活を営む力が高まった児童とは、してもらう喜びから誰かのために自分から何かができる喜びを感じられる児童であり、人と一緒に何かをすることは楽しいと感じる児童である。



(2)　「異年齢集団による交流活動」について

国立教育政策研究所生徒指導研究センター発行の「いじめを減らす」生徒指導支援資料３－②（平成23年）では、小中学校の特性と学校生活で想定される社会性の育成について、以下のように記されている。

「公立の小中学校ならではの、他の教育機関等にはない特徴は、同じ地域の異年齢の子どもが集まってくる場所、という点です。その利点を積極的に活用できれば、かつての近隣や家庭での異年齢交流による社会性の育ちを再現することも十分に期待できます」とある。その利点を積極的に活用することができる学校生活の場面が､意図的で計画的な異年齢集団による交流活動と考えられる。

かつての近隣の遊び集団は、何かをできるようになるためといった目的があったり、先に遊びのメニューやメンバーが決まっていて集合したりすることは少なく、自発的自然発生的、無目的なものであることが多かった。だからこそ、何か成果があったからよしとする結果重視の成果主義的な発想で、活動に価値を置くのではなく、一緒に遊びたいという気持ちを共有して一緒に活動したという経験や事実に価値を置くのである。そして、仲間と自分たちのルールで一緒にやっていくうちに、「仲間の中での自分の立場や役割に気づき、仲間集団にとって必要だと考えたことを、自分から行動する」ことを、自分で繰り返すようになることが社会性の育ちとなる。

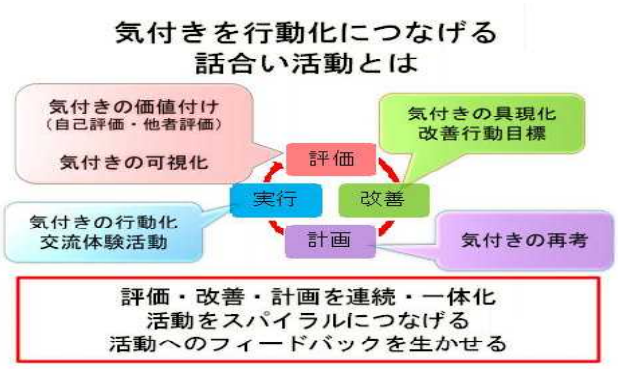
これに対して、学校内で行われている異年齢交流は、自分たちの意志に関係なく、先に集団やすることが決められている。年間を通して活動日や活動方法が決められているという点で計画的である。また、遊び集団は人間関係や運動能力の配慮などの教師の支援があり、遊ぶ場所は活動日ごとに決められ、遊ぶ内容はテーマが決められ、６年生にリーダーシップを発揮させる目的と支援があるなどの点で意図的である。子ども達自身が必要と感じているわけではないが、自分にも社会性があった方がいいと気づかせる体験の場として準備しているのである。

学校生活における異年齢交流による社会性の育ちとは、例えばたてわり班活動において、６年生が班をまとめていく経験を通して、下学年の気持ちを優先した思いやる言動、進んで準備や片付けをするなど最上級生としての自覚や責任ある行動が見られるようになることである。また、下学年児童は、上学年児童との関わり中で、集団としてのルールを学び、上学年への感謝や信頼や憧れの気持ちが持てるようになることである。そして、最初は集められただけの集団だったのが、一緒に活動していくうちに、自分から集団のために活動できるようになり、共に人と関わることのよさを感じ、楽しめるようになることであると考える。この社会性の内容は、本研究で目指している集団生活を営む力と同じものと考えられることから、異年齢集団による交流活動を意図的、計画的に取り組むことによって、集団生活を営む力を高めることができると考える。

２　気付きを行動化につなげる話合い活動の工夫とは

ある１つの活動に対して、計画（P)したものを実行し（D)、活動を振り返って気付いたことを話合い（C)、改善（A）して次回の活動に生かす。異年齢集団による交流活動は、年間を通して、

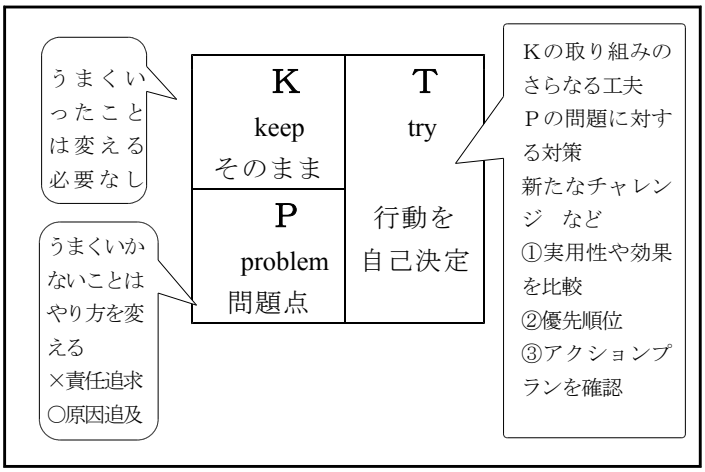
大小の活動が10回程度繰り返される。年間を通した活動において、この一般的なPDCAサイクルの A（改善）の行動目標を、思考の連続性を意識して次回の活動のめあてや活動計画（P)に生かしていく。これを繰り返していくことによって、児童が主体的に活動に取り組んだり、活動内容が深まったりすると考えられる。また、活動への主体的な取り組みが繰り返されることによって、人への関わりも深まり、人間関係も深まって児童同士の絆が深まっていくと考える。



3　話合いシート（KPTシート）の活用による話合い活動の工夫

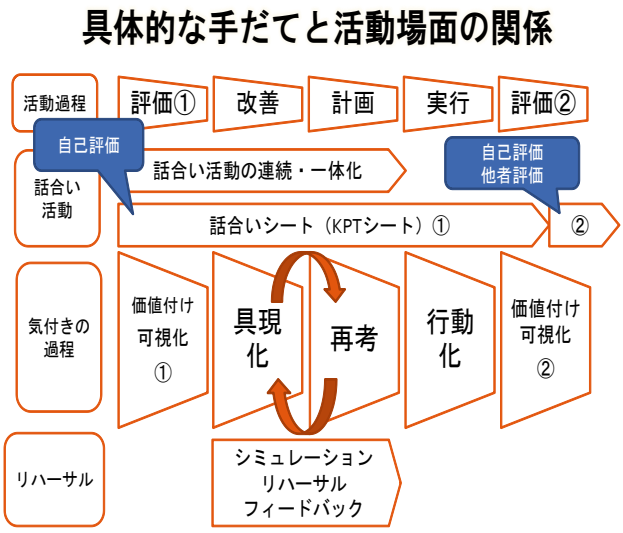
(1)　KPTとは

整理枠組みの１つで、Keep（継続）、Problem(問題点)、Try（挑戦）の頭文字を名称としている。平鍋健児氏が発表した「プロジェクト・ファシリテーション」の手法の１つである。活動経過及び、結果を対象にこの３つの観点についてブレインストーミングを行うことで、以降の活動にて取り組むべきことを洗い出すことができる。また、KPTは、「PDCA」サイクルにおける「C」(Check)「A」(Action)に該当する手法であり、活動の改善を加速させることができると考えられる。



このKPTシートを使うことによって、過去の問題や原因に焦点を当てるのではなく、「どうしたいか」「どうなりたいか」という、今とこれからに焦点をあてる話し合いができる。また、自分の考えを言語化して意味づけし、課題意識を持つことができ、話合いを可視化でき、全員が話合いに参加できる。さらに、掲示することで、班内の情報共有や、他班のシートを参考にすることによって情報収集ができる。他班の活動が刺激となって向上心が芽生える効果もあると考えられる。

「うまくいったこと」から書くという方法は、自分たちの頑張りを認め合い、自己効力感を高め、反省を素直に受け止められ、次回の活動に必要な行動目標を客観的に判断して決定できると考える。



(2)　KPTシートを活用した話合い活動の仕方

異年齢集団による交流体験活動における気付きについて、Keep（継続）→Problem(問題点)、→Try（挑戦）の順に書き進める。

①自分や班の人がしたことについて、うまくいったこと（やり方）を付せん紙に書き、K項目に説明しながらはる。

②自分や班の人がしたことについて、うまくいかなかったこと（やり方）を付せん紙に書き、P項目に説明しながらはる。その際、個人の責任追及や言い訳にならないように気をつける。

③K項目とP項目を参考にしながら、各自が行動目標を考えて付せん紙に書き、T項目に説明しながらはる。

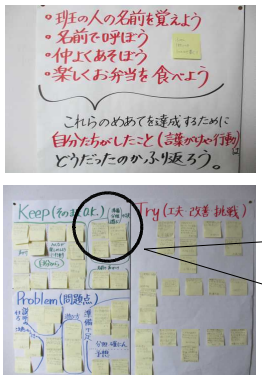
④T項目の内容から、優先順位や実行性を考えて、班で話し合って班の行動目標を決定する。

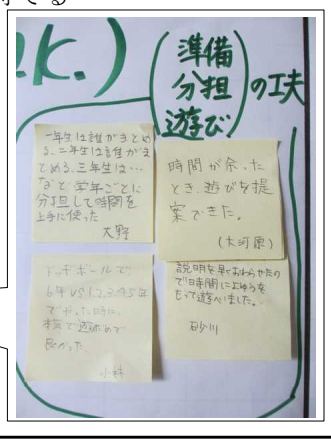
⑤T項目から班で決定した行動目標を元に、今何が必要か話し合って、班の実態に合わせた活動を工夫したり、注意点に気付いて、次回の班活動の内容を決める。

⑥異年齢集団による交流活動後に、前回のKPTシートと比較しながら、今回の活動を振り返る。

うまくいったことをたくさん見つけると、達成感や満足感、自己有用感が持てる

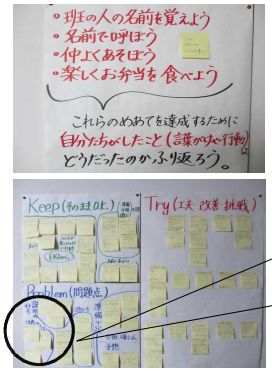
たてわり班活動（６月ロング集会）

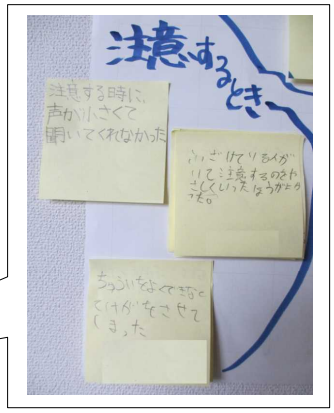




事柄に焦点を当てたり、自分を主語にしたりして考えるやり方を変えると状況も変わる

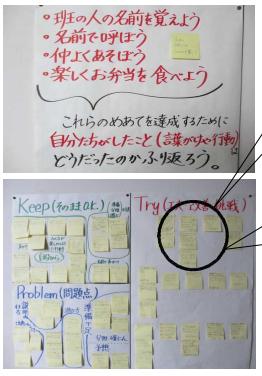
たてわり班活動（６月ロング集会）

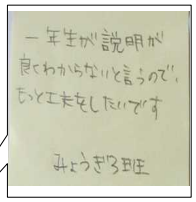




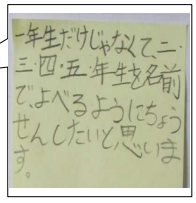
出された改善点に優先順位をつけて、自分たちの次の行動目標を決めたら、いつ、だれが、何をするのか決めると、やるべきことが具体的に見えてくるから、やる気がわく

たてわり班活動（６月ロング集会）





遊びの説明担当が、説明をしてから、準備係の２人が、遊びの見本を見せるようにする。



全員が集まらない間で、待っている○○、君の名前かいるとき、「僕は○○はけ？」と声をかけて、教えてもらったり、その場ですぐ名前で「○○さん、ありがとう」と声をかける。

(3)　KPTシート活用の留意点

・付せん１枚につき、１文にする。

・「○○を○○する」と文章で具体的に書く。

・書ける項目から書くではなく、KPTの順番を守って、１項目ずつ書く。

・個人でも集団でも構わないので、どんな些細なことでも書き出す。

・うまくいったことをどれだけ出せるかで、後の出方も変わるので、最初のK項目を褒めて認めて出し尽くさせる。

・T項目は、できるできない誰がするかなどはさておき、自由にたくさん出して、あらゆる可能性を検討するようにする。やりたくないことは、やっても効果があまり期待できないので、いつ、誰が何をするか具体的に決める際には、やる気度合いも見極める。

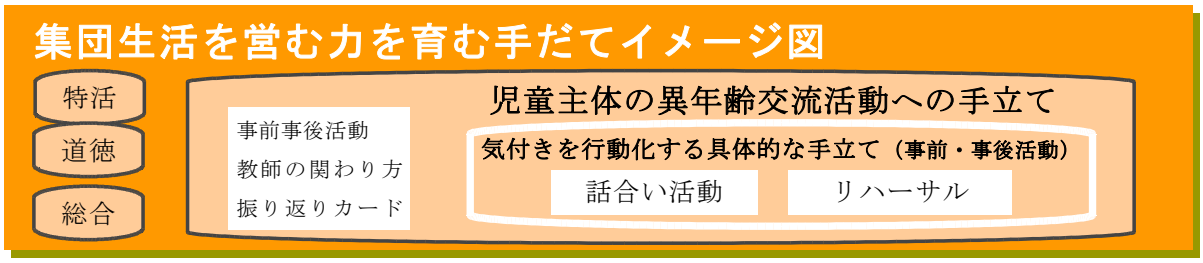
・全部終わったら、見えるところに貼っておき、いつでも、どの班のも見られるようにする。

・次回の振り返りの際には、前回のTの内容がKになったか、Pになったのかを確認からする。

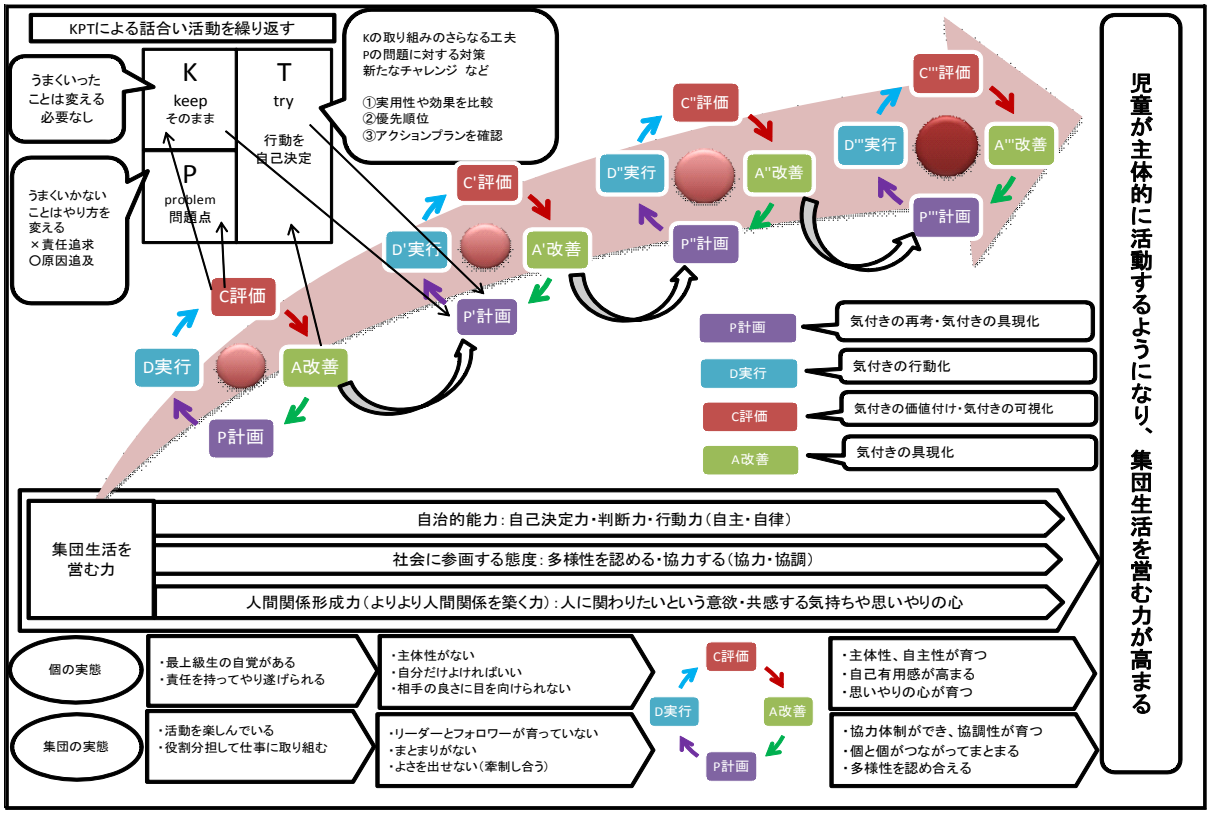
・付せんをはって発表し合うときに、同じテーマごとに出させて、項立てすると整理しやすく、後で見直すときも分かりやすい。また、次回の話合いに使うときも、テーマがあると振り返りの視点を持ちやすい。

4　研究構想図

(1)　研究全体構想図



(2)　児童が主体的に活動し、集団生活を営む力を高めていくイメージ図



Ⅵ　研究の計画と方法

1　実践計画

対象	小学校６年生（○名）	期間	平成○年10月～11月
時間	総合的な学習 児童会活動（朝行事＋児童会活動）	指導者	６年担任　○名 長期研修員

2　検証計画

見通し					検証の観点	検証の方法
1	活動計画作成場面において、アンケート結果をもとに班の課題や現状について話合い活動を行えば、班の課題や現状について共有し合うことができ、解決策を踏まえた行動目標や計画を主体的に考えることができるであ	場	手立て	目指す児童像	①仲間力アンケート結果をもとに、自分たちの言葉の改善点や班のめあてや活動内容について発言している。	①話し合いの様子観察 ②ＫＰＴ話合いシートの記述 ③活動計画表の記述 ④自己評価シート（総合）
		活動計画作成場面	仲間力アンケート結果をもとにした話合い活動	自ら課題を発見し、改善に向けて主体的に考える子		
		※気付きを促す				

	ろう。					⑤事後アンケート
2	活動の導入場面や活動直後の振り返りの場面において、話合いシートをもとに、活動の評価・改善・計画を連続して行えば、活動のねらいを踏まえた次なる活動の目標を持って計画することができ、主体的に活動に取り組むことができるであろう。 **★通年活動の良さを生かして意識をつなげる** **★振り返りとリハーサルも一体化できるとbest**	場 活動の導入場面 ※気付きの可視化 ※気付きの価値付け	手立て ＫＰＴシートを用いて、評価・改善・計画についての話合いを連続して行う	目指す児童像 自分達で考えて、主体的に活動しようとする意欲を持つ子	①今までの活動場面を振り返って、より楽しい班活動や仲間づくりのために、進んで発言している。 ②自分達の目標や目標達成のための具体的な方策を自分なりに考えて書いている。 ③活動のねらいと行動目標や活動計画に整合性がある。	①話し合いの様子観察 ②ＫＰＴ話合いシートの記述 ③活動計画表の記述 ④自己評価シート（総合） ⑤事後アンケート
3	交流活動前の時間において、気付きを具現化するためのロールプレイを行えば、実際の場面に対処する具体的な手だてを身につけ、問題解決への主体性を高めることができ、活動場面で自分で考えて主体的に取り組むことができるであろう。	場 計画立案後活動本番前の学年の時間（朝行事に時間） ※気付きの交流を通して再考 ※気付きを行動化する意欲の高まり	手立て ストップモーションロールプレイ（リハーサル） 具体的なゴール像をもって行う	目指す児童像 自分達で考えて、主体的に活動する子	①行動目標の具現化のために、ゴール像と現状を比較し、改善点や良さを認める言葉がけをしながら、協力してリハーサルを行っている	①リハーサル様子観察 ②ＫＰＴ話合いシートの加筆 ③活動計画への加筆 ④実際の活動での様子観察 ⑤自己評価シート ⑥事後アンケート
4	交流活動後において、全校児童による振り返りカードと班担当教師による６年生への支持的言葉がけを行えば、自己有用感や達成感が高まり、集団生活を営む力が高まるであろう。	場 事後活動（ロング集会後） ※気付きの交流による相互成長 ※気付きの交流による児童像達成	手立て 全校児童による振り返りカード（ロング集会）と班担当教師による６年生への支持的言葉がけ	目指す児童像 自己有用感や達成感による自己肯定感や次なる活動や人との関わりへの意欲を持つ	①振り返りカードや自己評価シートに達成感や満足感が書いてある。	①振り返りカードの記述 ②自己評価シートの記述 ⑤事後アンケート

６年生児童の気付きや発想を具体化・行動化につなげて、
６年生児童の主体性を高めることで、集団生活を営む力が高める

３　研究計画

なかよし遠足のめあて	○高学年児童を中心に、「たてわり班なかよし遠足」について、自分たちで考え、計画・準備・実施することにより、児童の自主性・主体性を伸ばし、自治的能力の育成を図る。 ○異学年集団活動を通して、上学年が下学年を思いやり、下学年が上学年に憧れを持ち、なかよく協力し、信頼し、支え合おうとする人間関係をつくる。	
評価規準（6年）	①集団活動や生活への関心・意欲・態度	たてわり班なかよし遠足の活動を楽しみにし、他の児童と協力して、自主的に取り組もうとしている。
	②集団活動や生活への思考・判断・実践	なかよく楽しい遠足にするために、班のめあてに向かって、自分たちで話合い、活動内容を企画し、工夫して活動を進めている。
	③集団活動や生活への知識・理解	たてわり班なかよし遠足の意義を理解し、そのための活動内容、人との関わり方などについて理解している。

月日	時間	活動内容	詳細（●留意点）	特活評価			研究との関わり
				①	②	③	
9/30～10/9までに	中休み等複数回	○集会実行委員を立ち上げ、全校たてわり集会の企画・準備（6年生の班長以外で、各班から1名立候補） ○全校たてわり集会のリハーサル	○全校たてわり集会の内容と係の仕事について話合った後、係分担を決める。 ○各係ごとに準備してリハーサルに臨む。 ●班長以外の6年生にもリーダー経験、活躍の場を確保し、できるだけ多くの6年生に当事者意識を持たせる機会を作る。 ●係ごとに準備する期間でも、適宜を持ち、進捗状況を報告し、気になることを全体で話し合う。 ●リハーサル前中後、気になることを出し合って確認する。	○	○		リハーサル
10/9（水）	学年合同特別活動①	■遠足を成功させよう～班活動をパワーアップ～	※事前に仲間力アンケート実施 ○アンケートの結果について話合い、目指す班の姿になるために、遠足までの活動において、できていること、問題点、解決策（アクションプラン）を考える。 ●班員の総意として数値を扱い、個人のアンケート回答内容について問わない。 ●アクションプランは、いつ、誰がどのようするのかまで具体的に話し合う。	○	○	○	仲間力アンケート KPTシート関連の活動
10/18（金）までに必ずしておく	総合的な学習②	○活動のねらいと概要理解 ○現地下見と活動場所決定	○活動のめあてと概要を理解する。 ○現地見学に行き、場所と活動内容を決定する。 ●交通事情や危険箇所、トイレの場所等も確認させ、リーダーとして現地確認をし、自分たちで決めて活動している実感を持たせるようにする。	○	○		
※早めに	総合的な学習②	○班の活動全体計画作り 話合い事項①から⑧ ①活動場所 ②活動内容（雨天時も） ③昼食の座席 ④班のめあてや約束 ⑤各学年への提案 ⑥担当学年 ⑦6年生内の分担 ⑧掲示物原案	○活動のねらいを意識しながら、遠足の行動目標を話し合って決める。 ○行動目標を生かして、活動全体計画を立てる。 ○3～5年の活動についても、これまでの活動経験を生かして、KPTシートで改善点や解決策を考える。 ●「班活動をパワーアップ」で作成したKPTシートを脇に置き、メモ代わりに気づいたことを書き足していくように促す。 ●計画作りを通して、遠足のねらいに気づいたり、思いやりやもてなしの心を持ったりできるように投げかける。 ●各自が自信を持って取り組めるように、仕事内容の確認、要望、疑問点を話し合ってから、役割分担を決めるようにする。 ●班員同士がより知り合え、仲良くなれるような遊びの工夫や昼食時の過ごし方を考えさせる。 ●時間が余った場合の活動を考えておくように伝える。	○	○		KPTシート関連の活動
10/11(金) 全校たてわり集会	朝活動	○実行委員会による「たてわり班なかよし遠足」について概要説明	○体育館に集合して、実行委から遠足のねらいや日程、各学年の取り組み、スローガン募集等を説明する。 ●昨年度の活動の様子が分かる写真や感想、6年生の意気込みなどを伝え、活動への期待を持たせる内容にする。			○	
10/18（金）	朝活動	★学年別活動（班制作物、活動内容の説明リハーサル）	○3～6年で活動する際の話合い活動のリハーサルをする。 ●どこで、どのように説明させ、何について話し合うのか、話合いの視点は何か確認したり、実際の文言の練習をしたりする。	○	○		リハーサル

			●安易に提案を多数決や確認決定で決めず、班員の意見を反映させた集団決定になるような話合いのイメージを持たせて練習させる。				
10/18 （金）	５・６校時 たてわり総合② （	○話し合い活動の司会進行 ○作業の確認と指示 ○活動内容や約束決定 ○班のポスター、目印、しおり決定 ○作業分担や作業計画の確認	○活動内容を説明・提案し、班で協議・決定する。 ○３～５年生が準備したポスター、目印、しおりの説明・提案を聞き、班で協議・決定する。 ○作業内容を確認し、できるところから進める。 ●最上級生としての自覚と責任感、話合いの視点を持ち、安易な多数決に頼らず、公正なルールで話合いを進められるように、班担当教師が話合いを支援し、集団決定できたことを賞賛する。 ●複数回にわたる６年生の指示や呼びかけに協力できない下学年児童は班教師が対応し、本活動が滞らないようにする。	**※自己評価シート記入から参照**			KPTシート関連の活動 **※自己評価シート** **※教師見取りカード**
10/21 （月）	学年合同特別活動②	■遠足を成功させよう～班活動をパワーアップ～	○目指す班の姿になるために、前回の合同たてわり総合の活動における自分たちの活動を KPT シートで振り返り、具体的な行動プランを決定する。 ●下学年への関わり方、班活動の進め方を中心に振り返らせ、次回の対応を具体的に決めるようにする。	○	○	○	KPTシート関連の活動
10/22 （火） ～11/6		○遠足出発式の企画・準備（６年生の班長以外で、各班から1名立候補） ○遠足出発式のリハーサル	○出発式の内容と係の仕事について話合った後、係分担を決める。 ○各係ごとに準備してリハーサルに臨む。 ●班長以外の６年生にもリーダー経験、活躍の場を確保し、できるだけ多くの６年生に当事者意識を持たせる機会を作る。 ●係ごとに準備する期間でも、適宜を持ち、進捗状況を報告し、気になることを全体で話し合う。 ●リハーサル前中後、気になることを出し合って確認する。	○	○		リハーサル
10/23 （水）	５・６校時 たてわり総合②	○作業確認と下学年への協力・相談 ○共同作業を通した交流	○材料や作業の仕方を下学年と相談して決め、一緒に作業をしながら交流を図る。 ●どの作業がどのくらい進んでいるか把握し、必要に応じて、指示、手伝い、割り振りをして、作業をスムーズに進められるように気配り目配りさせる。 ●一緒に活動しながら、作業の仕方を教えたり、会話したりして交流を図れるように支援する。 ●指示するだけでなく、進んで作業を手伝い、協力して進める進め方の手本を示す。	**※自己評価シート記入から参照**			**※自己評価シート** **※教師見取りカード**
10/25 （金）	朝活動	★学年別活動	○当日の仕事分担や進行状況等を確認する。 ●進行状況を共通理解し、見通しを持って進めさせる。	○	○		
10/29 （火）	5・6校時 たてわり総合②	○作業確認と下学年への協力・相談 ○共同作業を通した交流	○前時と同様 ●前時と同様 ●KPTシートの行動プランを活動前に班担当教師と確認し、作業と交流の推進を図ることを共通理解させる。	**※自己評価シート記入参照**			**※自己評価シート** **※教師見取りカード**
10/31 （木）	朝活動	学年集会を利用	○しおりの内容や活動内容の説明リハーサルをする。 ●立ち位置、文言などを確認させ、共通イメージを持たせる。	○	○		リハーサル
11/５ （火）	朝活動	班別で遠足の連絡・確認	○しおりの内容や活動内容の説明をする。 ●班担当教師は、上学年の準備活動の頑張りを認め、当日の活動への期待を持たせる話をする。	○		○	
11/８		○たてわりなかよし遠足	○班ごとのプログラムに沿って活動する。	○	○		

（金）		○なかよし弁当 ○清掃（ゴミ拾い程度） ※詳細は要項参照	●自信を持って取り組ませるために、教師による指示はできるだけ控え、積極的に人と関わり、班や仲間のために主体的に取り組む姿を見取って支持的言葉がけをする。 ●望ましい言動は、周りの児童にも聞こえるように認める声かけをし、教師が下学年によきモデルの視点を与える。				
		○振り返り活動（振り返りカード記入）	○１～５年生は、6年生への感謝や、活動への感想など、６年生は、１～５年生への感謝や活動への頑張りなどをカードに書く。 ●カードを書く前に、班担当から６年生のがんばりと下学年への思いやり、下学年からの憧れや信頼、集団としてルールを守って楽しく遊べたことへの賞賛を伝える。			○	振り返りカード **※自己評価シート** **※教師見取りカード**
11/８（金）	６校時たてわり総合	○まとめの活動（５・６年：体育館）	○掲示物原案をもとに、班員全員の振り返りカードを模造紙に貼ったり、絵を描いたりして掲示物を完成させる。 ●楽しかったことを思い出せるような掲示物にする。作業が一部の児童に偏らないよう適宜見回って声かけする。	**※自己評価シート記入参照**			
11/12（火）	学年合同特別活動②	■遠足を成功させよう～遠足をふり返ろう～	○今までのKPTシートに書いた内容について振り返り、自分たちが班のためにできたことについて話し合う。 ○話し合いをもとに、人との関わり方や集団のまとめ方について気づいたことをまとめシートに書く。 ●最初に班としての成果や課題を振り返り、その後自分について振り返るようにさせる。			○	KPTシート関連の活動 **※まとめシート**

事後 早いうちに	学活・ 道徳等	○作文等 ○事後アンケート	○満足度や達成感、下学年への思いやり、愛校心、人と関わり方についての自身の成長などをテーマに作文を書いたり、たてわり班活動の価値について、クラスで話し合ったりする。 ●ねらいを的確に達成している作文等は、学校便り等で紹介し、家庭にも活動の主旨や価値を伝えるようにする。			○	

４　今後の展望

なお、今年度中に実践研究を行わなかった理由は２つある。１つめは、進行中の教育活動への配慮である。特別活動は前年度末に年間行事計画が組まれ、新年度始めに再提案するのが一般的であり、校外者の単年研究のために、年度途中からの行事計画の大幅な改定は現場の教育活動に支障を来す恐れがあるからである。２つめは、教員間の共通理解への配慮である。活動期間中であっても常駐できない研究者が、学校全体の動きを把握し、中心となって連絡調整を行いながら全校に関わる活動に取り組むのは、昨年度まで在籍していた学校であったとしても状況が厳しいと判断したためである。

従って、ここでは、今後の展望として、以下の２点について取り上げることとする。

(1)　気づきを行動化に変える話合いシートの活用場面について

次年度本研究をもとに実践するための活動場面について考えた。

本研究では、異年齢の交流活動を年間を通して同じ班員で継続して実施しているという点で、活動の質を高めるために、気づきを行動化につなげる話合い活動の工夫が有効であると考えた。ここでは、班の中心となって活動する６年生グループでの話合いを想定しているが、高学年が付せんに書く手伝いをすれば、１年生から６年生まで班員全員で話合い活動を行うことも可能である。

また、同じメンバーで、活動に継続性、繰り返しによる成長の可能性があるという点から、話合いシート（KPTシート）を他の活動場面に活用することも可能である。例えば、クラス目標と現状

とのギャップを話合い、行動目標を決めたり、係や当番活動の活動改善を決めたりする学級活動や専門委員会活動が考えられる。また、教科での活用としては、音楽の合唱や合奏、体育のチームで取り組むゴール型ゲームやベースボール型ゲーム、リレーなどが考えられる。

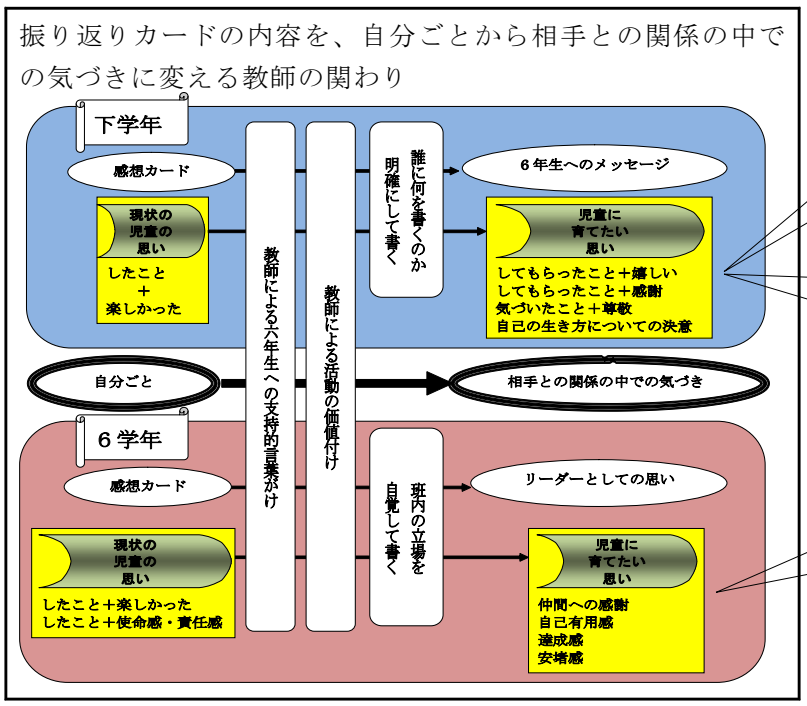
なお、勉強の仕方や夢に向かって進むための個人の目標達成にも活用できるが、その際にも、他者の意見を取り入れて広い視野から行動目標を決めることが重要である。

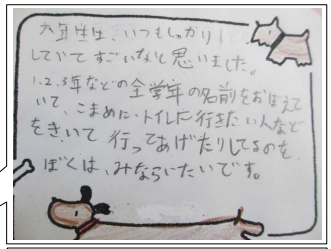
(2)　自己有用感や達成感を高める「振り返りカード」と教師の支持的言葉がけ

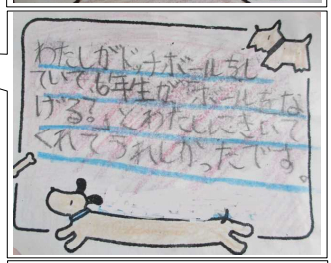
現在協力校では、年間２回あるロング集会後に、全校児童が小さいカードに感想を書く活動を行っている。下学年は、一緒に遊んだりお弁当を食べたりおしゃべりをしたりしたのが楽しかったなど、活動の楽しさを中心に感想を書いている。活動の中心である６年生は、遊びが楽しかっただけでなく、班員が楽しく遊んでいたことを嬉しく思ったり、大変ながらも活動をやり遂げたことに満足感や達成感を感じたという感想を書いている。６年生に「下学年に何て言われたら嬉しいか」と質問したところ、「楽しかった」「また一緒に遊びたい」「頑張っていた」「すごいと思った」などが挙げられた。今回の取組では、こうした「下学年に、仲良く一緒に遊ぶことで、楽しかったと思わせたい」という６年生の思いが叶えられており、達成感を感じることができている。

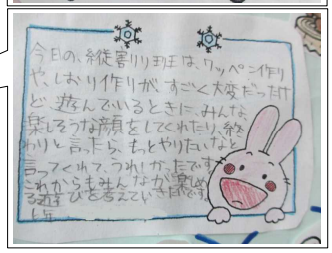
一方で、自己有用感については、カードに書かれた活動の楽しさだけでは、誰かの役に立ったという実感が得られない児童が多かった。自己有用感は、行った具体的な行動に対して、その時その場でただちにフィードバックされる言葉がけが重要となる。関わっている教師が、「よく気づいたね、ありがとう」「おかげでうまくいったよ」などの感謝の言葉、「頼りにしてるよ」などの信頼の言葉、「今見てたよ、すごいね」などの承認する言葉をその場で直接伝えることが、支持的言葉がけになる。班や仲間のことを思う具体的な言動を認め、主体的に関わっていこうとする意欲や態度に対し、嬉しい頼もしいと伝えることが教師の重要な役目となる。一緒に活動し、その時その場で支持的言葉がけをしていくことは、活動後の振り返りの時間にまとめて褒めたり、見取りカードに記入して担任に伝え、後で褒めてもらうよりも効果がある。また、児童に教師の評価を分かりやすく伝えることで、児童の評価と一致させていくことも可能となる。さらに、ふり返りカードに書く「感想」欄に、ただ感想を書かせるだけでなく、「６年生へのメッセージ」として位置づけ、具体的な活動場面を取り上げて、その時の気持ちを焦点化して書けるようにしていけば、下学年の児童の感謝の言葉が６年生へより強く伝わるようになる。

こうした取組により、６年生の達成感や自己有用感が高まると考える。









＜参考文献＞

・小学校学習指導要領解説特別活動編　　文部科学省（2009）
・堀　公俊　著　『ワクワク会議』　日本経済新聞出版社(2009)
・毛利　猛　著　『小学校における「縦割り班」活動』　ナカニシヤ出版（2007）
・『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」-活動実施の考え方から教師用活動案まで-』
国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）
・『「いじめを減らす」生徒指導支援資料３－②』
国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）
・『「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」-「人と関わる喜び」をもつ児童生徒-』
国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2005）
・田中　博之　著　『学級力向上プロジェクト』　金子書房(2013)
・『社会的な資質を育む特別活動の在り方に関する研究』
東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　第64集（2013）

＜研究協力校＞

高崎市立片岡小学校

＜担当指導主事＞

小林　秀之　　國峯　智